聖女の結婚 II

策士罠に掛かる

夏目 翠
Sui Natsume

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

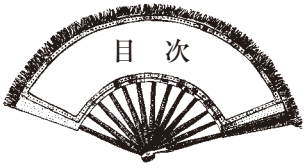
ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。

●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画　Laruha



目　次

序　章　事件は書斎で　9

第一章　いざ、審判の館へ　17

第二章　すべてが彼を指している　58

第三章　富に群がる人々　81

第四章　甦る記憶の欠片　105

第五章　探り合うお茶会　131

第六章　罠に嵌まったのは　150

第七章　隠れていた人　185

第八章　誰が策士か　201

終　章　赤子の正体　218

あとがき　232

ブラッドフィールド家

メイソン前伯爵（故）
①長女（故）
イーニアス・メイソン伯爵（42）
商家の娘（故）
ユアン（20）
カレン（19）
②長男デズモンド・ブラッドフィールド前公爵（享年74）
妻（故）
クリスティナ（享年20）
ビクター・リード（享年26）
男児（生死不明）
③次女（故）
マロリー前子爵（故）
チェスター・マロリー子爵（51）
レイチェル・カーター（40）

④次男（故）
フラット侯爵令嬢（故）
夫（故）
アンヌ（52）
⑤三女 シャーロット・ブラッドフィールド（62）
ブレイク前伯爵（故）
ミリセント（享年24）
ダニエル・ウィンガード（享年27）
ベンジャミン・フラット侯爵（27）
婚約
メアリ・ロゼット（16）
ジョシュア・ウィンガード・ブレイク伯爵（16）
婚約
リリアナ・マードック（24）

聖女の結婚
Ⅱ
策士罠に掛かる

序章　事件は書斎で

レアンダール王国でもっとも有名な家名はと問われれば、古今東西の区別なく、ほとんどの者がブラッドフィールドを挙げるだろう。

この国が大陸北東部の一小国でしかなかった時代に国土を広げた英雄の末裔であり、紡績業をはじめとする様々な産業を興し、莫大な富を築いた大富豪の一族でもある。ひいては王女の降嫁により公爵の位を与えられるなどして、話の種が尽きることはない。

王家を凌ぐ名声とありあまる富で、人々から羨望の眼差しを向けられている一族だ。

そのブラッドフィールド家の別邸の一室に、リリアナ・マードックはいた。

「あなたはジョシュアの本性を知っているんですか？」

鋭く切り込んでくる瞳はきれいな青緑色をしていた。まるで責めるような口調で問いかけてきたのはユアン・メイソン。ブラッドフィールドの分家筋に当たるメイソン家の青年だ。

リリアナは先日、八歳年下のジョシュア・ウィンガード・ブレイクと婚約した。

というのも、リリアナが亡くなった夫フランシスから継いだ金貸し業を続けていくのに必要だったためだ。この国では表向き、女性の就業を認めていない。

営業許可証を更新するにはとにかく結婚して、名目だけでも夫を立てる必要があったのだ。

ブラッドフィールドほどではないが、マードックの財産もそれなりに多かった。リリアナはそれをすべて受け継いだ未亡人で、しかも若いとくれば、男たちの下卑た野心をくすぐらずにはいられない。

その夫選びに難航していたとき、火に飛び込む蛾よろしく現れたのが、ジョシュアだった。

当初の思惑とは異なり、リリアナは策を弄してジョシュアを捕まえたはずが、気づけば、逆に絡め取られていた。この現状は彼女にしてみれば面白くないことこの上ないものだった。

しかし、それを赤の他人にとやかく言われる筋合いはない。特に、ユアンには。

今、このブラッドフィールドの別邸で始まっているのは、新当主を決める審議だ。その候補の一人として挙げられたのがジョシュアで、ユアンは対立するイーニアス・メイソンの息子だった。

ユアンの忠告に、リリアナの鳶色の目がすうっと細くなった。

「それがあなたに関係ありまして？」

「っ……」

「きっと、あなたがご存じの本性と、あたくしの知っている本性は違うのでしょうね」

言外に「相手にしない」と匂わせて、リリアナは扉に向かって歩を進めようとした——ところを、ユアンに腕をつかまれる。

「あいつは盗人です」

その言葉にリリアナは不快を顕にして、つかまれた腕を振り払った。

「いい加減にしてくださいません？　この首飾りのことでしたら誤解もいいところですわ。それはユアンさまもよくご存じのはず」

リリアナが身に着けているロサ・マリアの首飾りは、かつてブラッドフィールド家から盗まれた一品だった。だが、紆余曲折を経て正式にジョシュアの物となり、今はリリアナに譲られている。

根拠なく、婚約者が侮辱されるいわれはないとリリアナが続ければ、ユアンは「首飾りのことではない」と言い募る。

「あれは昔から、手癖の悪い子どもでした。一生直ることはないでしょう」

「その拠り所は？　あなたは何を以てジョシュアをそんな風に貶めるのですか？」

リリアナの目が鋭くなる。彼女の鳶色の瞳は猛禽類のそれによく似ているせいか、ユアンは怖じ気づいたように後ずさった。

「理由もなく、他人の婚約者を誹ることは名誉毀損に当たりましてよ」

ユアンはジョシュアをよく思っていない。理由は父であるイーニアスが自分よりもジョシュアに目をかけていることへの嫉妬だった。

ユアンの秀麗な顔が醜く歪む。

「ジョシュアが我がメイソン邸に引き取られた頃から、屋敷内で物が度々なくなるようになりました。ですが、金額も微々たるものでしたし、特に表沙汰にはしませんでした。……しかし、あいつが来て一年ばかり過ぎた日のことです。母の形見の指輪が盗まれる事件がありました」

イーニアスの妻で、ユアンとカレンの母は十八年前に亡くなっている。聞いた話では、奥方はカレンを生んだ産後の肥立ちが悪く、一年後回復することなく息を引き取ったらしい。

イーニアスはそれからずっと独身を貫いている。亡き妻への思慕ゆえと解釈され、世間では彼は大変な愛妻家として有名だった。

「……それで？」

リリアナは端的に、メイソン邸で起こった過去の顛末を促す。

「幸いなことに、指輪はすぐに発見されました」

「なら問題はないですわね」

話は終わりだと切り上げようとしたリリアナに、ユアンが口早に続けた。

「持っていたのがジョシュアだとしても？」

リリアナは自分より背の高いユアンを、じっと見上げた。

下からのぞき込むと、青緑色の瞳が自信に煌めいている。長い沈黙の後、リリアナはゆっくりと口を

動かした。
「……それで、彼は何と？」
「えっ……」
冷静な返答が返ってくるとは思ってもみなかったのだろう。ユアンは慌てていた。
おそらくユアンは、指輪を持っていたのがジョシュアだと突きつければ、リリアナが衝撃を受けると思ったのだろう。
リリアナは空気を変えようと、中庭に面した窓を開けた。心地よい風が頬に当たる。
「ですから、ジョシュアは何と言ったのです？　自分で盗ったと白状したのですか」
リリアナの問いかけに、ユアンは眉根を寄せてかぶりを振る。
「盗人が自分から『盗った』と言うと思いますか？」
「あなたはジョシュアがやったとお思いですの？」
「当たり前です！」
「では、それ以前に盗まれた物も、ジョシュアの部屋から発見されたんですの？」
「っ……」
リリアナの問い返しに、ユアンは目を見開く。視線を逸らして、ぽつりとつぶやいた。
「……あいつが盗んだに決まっています」
「そうかしら」
小首をかしげるリリアナに苛立ったように、ユアンが力説する。
「我が家に引き取られるまで、あいつは王都の浮浪児で、多少の荒っぽいことも厭わない子どもだったんですよ？」
興奮して喋る口調は乱暴になり、頬は紅潮している。
「それと指輪の盗難に何の関係が？」
ユアンは、リリアナの目が軽蔑に染まっていくことに気づいていない。気色ばんで声をますます荒らげる。
「ですから、ジョシュアには盗人をする動機があっ

たと――」
「あまり、頭の悪いことをおっしゃらないでくださいな」
リリアナが遮ると、ユアンは呆気にとられた顔をし、一瞬の後内容を理解したようだ。
「あっ……は、はあ⁉　あにゃたが…」
「失礼しますわ」
動揺のあまり呂律の回らないユアンを置いて、リリアナが立ち去ろうとする。
「お待ちください！」
ふたたびユアンにつかまれた腕の痛みに、リリアナは顔をしかめた。
「僕は本当にっ……」
「では、あなたは見たんですか？　ジョシュアが指輪を盗むその瞬間を」
すると、それまでの勢いはどこへやら、ユアンは気まずげに視線を逸らした。
「……あいつが盗ったに決まっています」
見たわけではない。もごもごとつぶやいている。歯切れも悪く、それでもジョシュアを罵るユアンに、リリアナは呆れた。
「そうですか。では、ごきげんよう」
話にならないとばかりに、リリアナは腕を振り払おうとしたが、ユアンが力を込める。
痛みのあまりにらみつけるも、ユアンは説得しようと必死だった。
「待ってください！　一緒にいたらあなたもきっと騙される」
あら、とリリアナは片眉を上げる。
「あたくしを誰だとお思い？　リリアナ・マードックですのよ」
そのような助言は必要ないと、ユアンの絡んだ指を放そうとした。
だが、ユアンはそれでも諦めない。
「あなたは騙されている。あいつは……」
「黙って」

かすかに聞こえた異変に、リリアナはすばやく反応した。

「今、悲鳴が聞こえませんでした？」

「え」

困惑のあまり、ユアンの指が放れた。自由になったリリアナは、窓から身を乗り出して方角を確認する。

リリアナの記憶にあるあの頃と同じ、美しく整った中庭が眼前に広がる。よく晴れた青い空と白い建物の対比が目にまぶしい。二つを結ぶのが植え込みの緑であり、熟練の職人たちによって細部にわたって計算されて刈られているのがよくわかった。

そんなレアンダール王国屈指の大富豪であるブラッドフィールド家の別邸、優美な造りで有名な場所に似つかわしくない、絹を裂くような悲鳴が響き渡る。

封鎖されていると聞いた東塔二階の一室の窓が開いていた。

十六年前に惨劇の舞台となった建物を見て、リリアナは身の毛がよだつ。

脳裏に甦るのは、辺り一面に飛び散った血と、鉄くさい血臭だった。

「っ……」

込み上げる吐き気を堪え、リリアナは尋ねた。

「あの部屋は？」

「……書斎でしょうか――マードック夫人⁉」

リリアナは廊下に飛び出した。

西塔から続く渡り廊下を足早に過ぎる。悲鳴はさらに大きくなっていた。

転倒しそうな勢いで駆けつけた先は、東塔二階の廊下の一番奥にある書斎だった。扉が開いている。

「何があったんですの⁉」

よく磨かれた調度品――南方から取り寄せられた特別な木材によって作られ、磨き抜かれた棚や机の傍らに、メイドが座り込んでいる。

「あっあ……」

リリアナの顔を見て、メイドは少し安堵の表情を見せる。脅えつつも何かを伝えようと、部屋の中を指さした。

「どうかして？」

「あ……あれ、を」

震える指が示す先を見て、リリアナは息を呑む。見るからに滑らかそうな手触りの高級絨毯の上に横たわっている体。その顔は――

「何事ですか⁉」

遅れてやって来たユアン・メイソンの声にも、リリアナは振り返らなかった。ただ、眼前の光景だけを見つめている。

「ライアン弁護士……」

倒れているのはブラッドフィールド家の首席弁護士であるマシュー・ライアンだった。

おそるおそる近寄って確かめたが、既に息はない。その手は胸を掻きむしったような形をしており、両目をかっと見開き、苦悶の表情を浮かべたまま、微動だにしない。

「どうしてこんなことに……」

「わっ、わたしがこの部屋に入ったとき、ライアンさまが倒れておられて……その方が」

メイドが震えながらも、机の陰になっている場所を指さした。この部屋には、もう一人の人物が存在していたのだ。

「え……」

リリアナのよく知る人物が座り込んでいた。

すぐさま、ユアンが問いつめた。

「おまえがやったのかっ」

「っ――」

金髪碧眼の少年は微動だにしなかった。もともと白い肌はさらに青ざめて、色を失っている。

「ジョシュア……」

リリアナのつぶやきはまるで吸い込まれるように消え、少年には届かなかった。

十六年前、この屋敷で四人の男女が殺された。時

を経て今ふたたび、惨劇が繰り返されるというのだろうか――

第一章　いざ、審判の館へ

忘れるんだ……
君は何も見ていないし、聞いてない
ここには誰もいなかったんだ――

人生一寸先は闇。

馬車の心地よい振動に身を任せながら、窓の外を眺めていた。目の前をゆっくりと流れていくのどかな風景とは裏腹の境地で、リリアナは溜め息を吐いた。

「どうしてこんなことになったのかしら……」

リリアナは十六歳で五十歳以上年の離れたフランシスと結婚した。五年間の結婚生活の後、夫が病死したため、家業である金貸しを営むマードック商会を引き継いだ。

強突張りの因業爺として悪名高かったフランシスを惑わせ、ついには家業を乗っ取った希代の悪女と、リリアナは称されるようになった。

この悪名とフランシス仕込みの商才で、事業は順風満帆だった。少なくとも、ほんの二、三ヶ月前までは。

「どうしてって……それはリリアナがオレと婚約したからだろう？」

隣の席からリリアナの顔をのぞき込んでくるのは、十六歳のジョシュア・ウィンガード・ブレイク。金髪碧眼の若き伯爵で、今となっては不本意ながら、リリアナの婚約者だ。

「ほら、婚約の証もあるし」

そう言って、リリアナの首元を彩る紅玉の首飾りにジョシュアが触れた。

これもただの首飾りではない。持ち主に不幸をもたらすといういわくつきの「ロサ・マリアの首飾り」なのだ。それが婚約の証とは、普通の女性ならば、随分と気持ちが悪いだろう。しかし、この首飾りがリリアナとジョシュアを繋げた。

そもそも、二十四歳のリリアナと十六歳のジョシュアの婚約はそうそうあることではない。世間一般において、男女の年齢差が逆であれば、よく見られる光景だが、八歳も年上の女性を妻に娶るという行為は珍しい。

きっかけは、リリアナが取り立て先で薄汚れたジョシュアを拾ったことだった。身元不明の少年の存在は当時、家業存続のために結婚の必要に迫られていたリリアナに救いをもたらすように思えた。策を弄して、嫌がるジョシュアを罠に嵌めたはずだった。

しかし、事が終わってみれば、ジョシュアは確かに天涯孤独の身の上だったが、大富豪ブラッドフィールド家の後継者候補であることが判明する。

嫡子のいなかった先代当主デズモンドは遺言書に四人の後継者候補を記した。それを末の妹であるシャーロット・ブラッドフィールドに託し、もっともふさわしい人物を選ばせるという。

そのシャーロットが候補者たちに出した条件が妻、もしくは婚約者に相当する女性を同伴することだった。

こうしてリリアナは嫌々ながらも、ブラッドフィールドの別邸があるロアンの地を目指している。

ロアン。王都の南に位置し、一日で来られる保養地として有名だ。港があり、交易の中継地として古くから賑わっている。

若い女性に人気の観光地だが、リリアナの心は躍らない。それどころか、この名前を耳にするたびに気持ちが沈む。

それというのも、十六年前に資産家令嬢夫妻殺害事件が起こった屋敷があるからだ。

この事件でリリアナは屋敷でメイドをしていた母

親を、ジョシュアは滞在していた父親――ブレイク伯爵家の婿養子――をそれぞれ失っている。しかも、リリアナに至っては、当時の記憶さえもあやふやで、今も悪夢に魘されていた。

続く悪夢を終わらせるためにも、そして、自分たちの家族を奪った犯人と、どうして奪われなければならなかったのかという理由を知るために、リリアナはジョシュアと共にこの地を踏むことにしたのだ。

すべての鍵になり得る唯一の場所を前に、リリアナは目を伏せた。

「えらく無口だな。……疲れたか？」

黙り込んだままのリリアナに、ジョシュアが気遣うような眼差しを向ける。

「放っておいてちょうだい」

気分が沈むのは緊張のせいか。それとも、過去の事件のせいか。

いずれにせよ、少年に心の内を明かすつもりのないリリアナは、ぷいっと顔を逸らした。

だが、少年はしつこかった。

「もしかして緊張しているのか？　あの、リリアナ・マードックが」

リリアナは仮面の下で、視線を険しくする。

金貸しという職業柄、命を狙われることも少なくない。また、女性であるが故に商売相手に甘く見られることのないよう、リリアナは顔の上半分を隠すような仮面を付けている。

そのため、巷では「仮面の未亡人」と呼ばれていた。

「ちょっと仮面を取ってみるか――痛えっ」

ジョシュアがからかい半分で伸ばしてきた手を、リリアナは閉じた扇で叩き落とした。

「あたくしに触らないでちょうだい」

ぴしゃりといい音が響く。叩かれた甲を振りながら、ジョシュアの声色が変わる。

「で、何を悩んでるんだ？」

それまでのからかうような口調は影を潜め、真剣

にリリアナを案じている。
この少年は意外と敏い。お人好しで騙されやすいところはあるが、相手の本質を捉える能力に秀でている。
だからこそ、リリアナは相方に選んだわけだが、人生まで分かち合うつもりはない。リリアナとジョシュアを繋いでいるのはロサ・マリアの首飾りと利害関係だけだ。
「……うるさいわね。あたくしは人生の悲哀について真剣に考察しているの」
邪魔をするなときつくにらんでも、ジョシュアはどこ吹く風という感じだった。
「何が悲哀だよ。もしかしたらブラッドフィールドの当主夫人になれるかもしれないのに」
呑気な言い草に、リリアナは嘆息するしかない。
「限りなく勝ち目の薄い勝負だというのに、よくもそんなことが口にできること」
リリアナの当てこすりにも、ジョシュアは動じない。
「まあ、確かに勝算は薄いわな。でも、何とかなるって」
「いい加減なことを――」
声を張り上げようとしたとき、ゆっくりと馬車が止まった。
「どうぞ、こちらへ」
扉を開けたのは、リリアナの執事であるヴァレンティンだ。煉瓦色の髪に赤琥珀の目を持つ執事は、いつもと同じ調子で振舞う。
だが、目の前に広がっているのは壮麗な屋敷だ。扉一つでさえ重厚な風格を醸し出し、叩くことさえ躊躇われるほどに。
「おお、さすがにでっけーなぁ！」
場の空気を読まない率直な感想を口にしたのは、ヴァレンティンと同じく御者台に座っていたバートルミー・ジェラルド。いつもはボサボサの頭と無精髭が、今日はかろうじて整えられている。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。